

調査報告

正課外の諸活動を通じた大学生の成長実感尺度の開発 —質的内容分析による成長実感の探索と成長実感尺度の因子構造の検討—

深谷 麻未*・木原 宏子**・岸岡 奈津子**・茅根 未央***・渡邊 あい子****・

石田 明菜***・松浦 祐子****・西田 祐太郎****・尾本 真璃恵****・中山 博文****・

本田 容子***・細川 千絵**・堀辺 辰也*****・松本 清*****・山野 洋一*

要旨

本稿では「立命館大学 Grassroots Practice Support Program to Promote R2030: GPSP」の「正課外の諸活動における学生の成長の可視化－評価指標の作成と標準化および諸活動学生への適用と成長のプロセスの探索－」における2022年度の活動について報告をおこなう。本報告は混合研究法を用いて、3155名の質的データと2355名の量的データから、学生の成長を測定する多面的な尺度群を開発することを目的とした。研究Ⅰでは、課外活動をおこなっている全国の大学生3155名の課外活動を通して身についたことに関する自由記述から、困難な出来事と成長の要素を140個抽出した。その要素から109項目を抽出し、7つの尺度を作成した。研究Ⅱでは7つの尺度を用いて、2023年3月に全国の大学生2355名を対象に調査を実施した。因子分析をお

-
- * 執筆者：深谷麻未^①・山野洋一^{②③}
 所属/職位：立命館大学 学生部 衣笠学生オフィス/契約職員（専門職）
 連絡先：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
 E-mail ①：fukay-a@st.ritsumei.ac.jp
 E-mail ②：yamano-a@st.ritsumei.ac.jp
 E-mail ③：y-yamano@hotmail.co.jp
- ** 執筆者：木原宏子・岸岡奈津子・細川千絵
 所属：立命館大学 学生部 OIC 学生オフィス
 連絡先：〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150
- *** 執筆者：茅根未央・石田明菜・本田容子
 所属：立命館大学 学生部 BKC 学生オフィス
 連絡先：〒525-0058 滋賀県草津市野路東1丁目1-1
- **** 執筆者：渡邊あい子・松浦祐子・西田祐太郎・尾本真璃恵・中山博文
 所属：立命館大学 学生部 衣笠学生オフィス
 連絡先：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
- ***** 執筆者：堀辺辰也
 所属：医療法人堀辺医院
 連絡先：〒581-0037 大阪府八尾市太田3丁目59
- ***** 執筆者：松本清
 所属：東京工業大学
 連絡先：〒152-8550 東京都目黒区大岡山2丁目12-1

こなった結果、合計7尺度26因子が抽出された。作成した尺度の α 係数は .758-.923 と高かった。また、立命館学園が2020年から2030年にかけて実現を目指す人間像尺度と正の相関が認められた。くわえて、学生が成功するための学習方略尺度やストレス反応尺度、PTGI-J (Posttraumatic Growth) との相関関係が認められた。以上のことから、作成した尺度は一定の信頼性・妥当性を有したアセスメントが可能であることが示された。

キーワード

課外活動, 成長実感, 自己効力感, 学生の成功, 混合研究法

1. 緒言

1-1. はじめに

本稿は「立命館大学 Grassroots Practice Support Program to Promote R2030: GPSP」の「正課外の諸活動における学生の成長の可視化－評価指標の作成と標準化および諸活動学生への適用と成長のプロセスの探索－」における2022年度の活動について報告をおこなうものである。本活動は、混合研究法の探索的順次デザインを用いて、学生の成長実感を測定する尺度を開発することを目的とした。そのために、研究Ⅰは、課外活動をおこなっている全国大学生3155名による、課外活動を通じた成長に関する自由記述データから、成長実感に関する要素を抽出・尺度化することを目的とした。研究Ⅱは、全国大学生2355名を対象としたWEB調査によって尺度の因子構造を明らかにすることを目的とした。

海外では学生の成功の1つの要因として課外活動があげられている (Kuh et al, 2006)。Terenzini et al (1995) の調査では、正課と課外活動の両方をおこなっている者ほど、学習成果である学問的知識 (Intellectual Skill) の獲得の程度は高いことが明らかとなっている。また、国内でも迫ら (2002) によって、高校での部活動経験の有無に関わらず、大学で課外活動をおこなっている学生は大学生生活の満足度が高いことが示されている。このような背景もあって、2000年前後から課外活動や正課外教育が重要視されはじめ、当時の文部省の答申 (文部科学省, 2000) では、「学生の立場に立った大学作り」である「課外教育の積極的な捉え直し」が指摘された。その後、溝上 (2007) は、大学教育は正課教育だけではなく正課外教育も含めて考えられるべきであると指摘している。また、山田ら (2010) の調査では、正課外は正課に対して、汎用的技能の一部である社会的関係形成能力や持続的学習・社会参加力などを獲得する役割があることが示された。

1-2. 課外活動の種類の多様化

さらに近年では国内における課外活動の種類も多様化してきている。従来、国内での課外活動はクラブ・サークルを指すことが主流であった。しかし、池田ら (2019) の分類では、大学

や大学教職員の関与がない活動を狭義の正課外、教職員の関与がある学生プロジェクトなどを準正課としている。また、狭義の正課外と準正課を含め、非単位付与型教育実践を広義の課外活動としている。その他にフォーマル集団とインフォーマル集団として、区別される場合もある。フォーマルな集団は、明文化された階層的な地位構造に、没个性的に成員を配置することで形成され、特定の習慣的システムを持ち、それに従い成員の行動が規定される集団とされている(広田, 1963)。インフォーマルな集団とは、個人の目的や特性によって成員が比較的自由に行動をとりうる集団とされている(Newcomb, 1950)。橋本ら(2010)は、大学生のサークル集団は趣味やスポーツをおこなうという個人的な目的に基づいて活動すると同時に、組織運営などの面で役割や規則によって行動が規制されていることから「準組織」的な集団として位置づけている。さらに河本ら(2016)は、短期の海外留学プログラムの体験活動を課外活動として捉えている。くわえて、ピア・サポートも課外活動に含まれる可能性がある。泉谷ら(2013)は、ピア・サポート活動を「学生を取り巻く問題を軽減するための労働者」ではなく学生の学びと成長の機会になると捉えている。岸岡ら(2023)の最新の研究では、ピア・サポーターには、チュータリングスタッフ、ピア学生、先輩学生など様々な呼称があり、「学生アドバイザー」と統一する場合もある。

1-3. 課外活動の評価方法の多様性と課題

課外活動の定義が多様なため、上記の先行研究で用いられている評価方法やアセスメントも研究別に異なっている。池田ら(2019)の調査では、準正課外活動とキャリアレジリエンスの関係が報告されている。レジリエンスとは困難な状況により一時的に心理的に不健康な状況になってもそこから回復し適応していく力(村木, 2016)で、池田ら(2019)によると準正課外活動による同期の支援がキャリアレジリエンスを高めることが報告されている。また、池田ら(2018)は、その前提となるキャリアレジリエンスを測定するためのアセスメントを開発している。課外活動を準組織とした橋本ら(2010)の調査では、集団フォーマル性に関するアセスメントを開発し、フォーマル性の高いサークルほど人間関係を好意的に認知し、成員の責任感や規範意識が高揚することが報告されている。体験活動(短期留学プログラム)を課外活動とした河本ら(2016)の調査では既存の尺度を用いて、体験活動は社会情動的発達に効果があることが示されている。具体的には他者との関わりが求められる活動や、思い通りにならない他者とうまくやり取りする体験が、外向性の得点を上昇させると報告されている。泉谷ら(2013)の研究では、ピア・サポート活動を通した学生の成長についてインタビュー調査を実施している。ピア・サポート活動は目的・目標および団体のミッションに基づいた行動が身につくと報告されている。また、岸岡ら(2023)の研究では、学生アドバイザーが活動を通して獲得するコンピテンシーを質的に分析しており、140の要素を抽出している。

このように課外活動を通した学生の成長に関しては、多様な課外活動をどのように捉えるか

で測定方法も大きく変化する。尺度開発から行われている研究もあれば、既存の尺度を用いた研究、質的に検討が行われた研究など分析手法も多岐にわたる。多くの調査が既存の尺度を用いてや質的に分析されていることや、課外活動の有用性は認められているものの大学から高く評価されない(茂里, 2000)という矛盾があることから、課外活動に関する尺度開発の研究は盛んではなく、国内での課外活動を通じた学生の成長を特定することは困難な状況である。

1-4. 本報告の目的

近年、海外ではこのような複雑化した事象を研究テーマとする場合に混合研究法が用いられている。混合研究法は質的データと量的データの両方を収集し、2つを統合し、両方のデータがもつ強みを合わせたところから解釈を導き出す、社会、行動、そして健康科学における研究アプローチである(抱井, 2015)。混合研究法には収斂デザイン、説明的順次デザイン、探索的順次デザインの3つがある。

そこで、本報告の目的はクラブ・サークル活動、ボランティア、ピア・サポート活動、学生スタッフ、準正課外活動、体験活動など様々な非単位付与型教育実践(課外活動)をおこなう学生を対象に共通した成長実感や困難な出来事に関する尺度を開発することであった。まず、課外活動をおこなっている学生の質的データから要素を抽出し、尺度を作成する(質的分析)。また、その尺度を用いて全国調査を実施し、作成した尺度の信頼性と妥当性の検証をおこなう(量的分析)。本報告は質的分析の結果から量的分析に発展させる混合研究法の探索的順次デザインを用いた。

2. 研究 I

2-1. 目的

研究 I の目的は、質的内容分析によって尺度の項目を作成することである。立命館大学の学生部がすでに取得し、対応表のないデータベース化された全国大学生3155名の自由記述を分析対象とした。自由記述は、課外活動を通して身についた力、活動を進める中で気つけたこと、困ったことや困難な出来事を通して身についたこと、感情的になりそうな場面で気つけたことに関する内容であった。調査は2019年、2020年、2021年に課外活動をおこなっていた学生に対して、WEB アンケートシステムを用いて実施した。質的な分析は、学生生活支援をおこなう専門家・職員と心理専門家の合計22名で KHcoder の共起ネットワーク分析(樋口, 2020)と KJ 法(川喜田, 1970)を参考にした質的内容分析を用いておこなった。以下に作業の手順を記述した。

2-2. 方法

1) 第1段階 (カテゴリの生成)

KHcoder の共起ネットワーク分析を用いて、学生生活支援をおこなう修士以上の学位を持つ専門職 (心理学・社会福祉学・教育学分野) 6 名と職員 6 名 (以下, チーム A) で, 元の記述を参考に分類の基準となるカテゴリを作成した. 共起ネットワークは, テキストから抽出された語 (ノード, node) の出現頻度を円の大きさと表現し, その抽出語同士の共起関係 (エッジ, edge) を描画するものである. 共起ネットワークでは, サブグラフ検出を適用し共起関係のある単語群を抽出した. サブグラフ内の各単語群における共起関係と元の自由記述を参考に, チーム A で検討会を 8 日間実施し, サブグラフの解釈を行い, チーム A 間の合議を経て要素の抽出を行った. その結果, 140 の要素が抽出された.

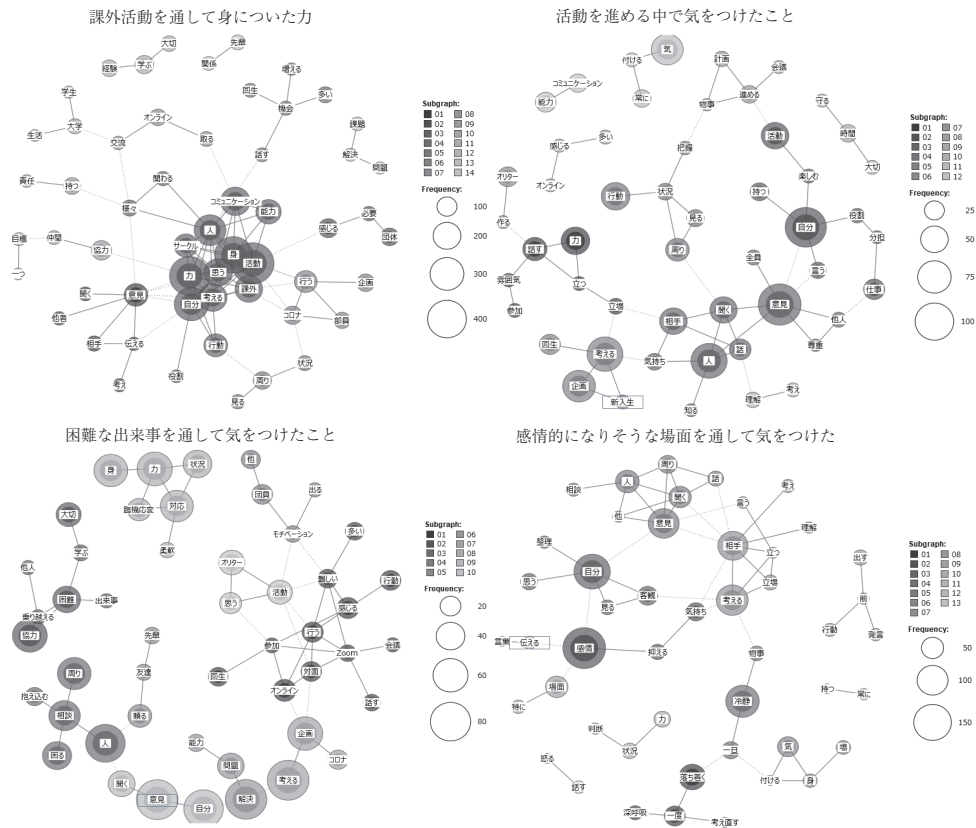


図1 課外活動を通じた成長と困難な出来事に関する記述の共起ネットワーク分析

2) 第2段階 (項目の作成)

公認心理師を有する専門社会調査士 1 名 (学生生活支援をおこなう専門職) と修士以上の学位を持つ心理専門家 9 名 (以下, チーム B) で, 元の自由記述を意味のある文節単位に区切っ

表1 質的内容分析で抽出された学生の獲得した成長実感の要素と困難な出来事

様々な人と交流	ストレス発散	意見の表出	活動参加
状況を見る	頼る	意見の尊重	執行部役割・リーダーシップ
大学の意見	切り替え	役割分担	意見伝える
ボランティア活動	関係性を深める	モチベーション維持	意見聞く
社会との関わり	オンライン対応	コロナでの企画変更	新入生と交流
授業外での学習	新入生支援	先輩友人に頼る	メンバー協力
協力する	問題解決	他者と問題解決	企画立てる
責任を感じる	相談の雰囲気	他者の意見聞く	挑戦
相手の立場	交流が楽しい	他者に相談する	学ぶ
学習計画	ルールを守る	仲間と乗り越える	意見をまとめる
アルバイト	コロナでの活動	臨機応変な対応	自己コントロール
臨機応変	自分から発言・行動	オンラインでの難しさ	先生と交流
他人を気にする	zoomでの交流	個人の要因	自己省察
忍耐	サブゼミ企画	深呼吸	責任感
企画運営	人前で話す	感情的にならない	関係構築
他者意見を聞く	立場考える	感情を抑える	否定しない
他者に伝える	後輩サポート	客観整理	受け入れ意見する
役割認識	活動を活かす	冷静に考える	空気を読み発言
他回生と話す	人とかかわる	相談する	感情を読み取る
状況把握	企画の機会	空気に合わせる	多様を受け入れる
部員と企画	相手の立場	雰囲気を読む	良好な関係
オンライン力	リーダーの立場	行動を吟味する	意思疎通気を付ける
責任感	就活	整理判断	雰囲気・環境づくり
仲間と協力	組織の一員	冷静を保つ	コミュニケーション
経験を通した学び	仲間と協力	怒らない	オンラインコミュニケーション
課題発見	他者愛	素直に伝える	意識をする
先輩との関係	リーダーシップ	場から離れる	計画力
積極に発言する	グループワーク	休憩を入れる	会議進行
周り観察	グループの活動	明るく振る舞う	ルールを守る
新入生視点	共同作業	話し合う	協働
会議意見	相手に意見を伝える	仲裁	理解の促し
お互い成長	相手の意見聞く	後のこと想像する	多様性の理解
考え行動	対人関係で活かす	全体観に立つ	状況把握
相手考える	積極的に行動する	伝え方に気を付ける	明るい雰囲気
立場考える	臨機応変な対応	感情をぶつける	相手の立場

てユニットを作成する作業を3日間おこなった。その結果、8051ユニットが抽出された(工程①)。ユニット化されたひとつひとつの自由記述を、上記の140要素の中で、どの要素に該当するのかフラグを立てる検討会を10日間実施した。同時に、同じフラグの記述を集め、小カテゴリ1259個に分類した(工程②)。更に小カテゴリは、元の記述を参考にしながら項目化をおこなった。その際に、項目化すると意味が重複するもの、内容が曖昧なものは削除した。また、小カテゴリによっては、複数の項目が生成される場合は合議によって複数に項目を分割した。これらの検討会を14日間実施した結果、109項目に厳選した(工程③)。

3) 第3段階(領域の整理)

チームAとチームBで3日間の検討会を実施し、項目化された109項目をさらに上位の概念に分類し、大カテゴリの作成を検討した。その結果、24の大カテゴリが生成された。また、カテゴリを領域別に分類すると、6領域と1つの困難な出来事から構成されていた。

2-3. 結果と考察

「困難な出来事」は正課と課外の両立の難しさや他者との実力の差を感じるなどの20項目で構成されていた。第1領域は失敗を恐れない、活動の価値を見出すなど、困難な出来事に遭遇して乗り越えるような行動10項目から構成されていることから「レジリエンス」とした。第2領域は企画すること、ITリテラシーを使いこなすこと等の卒業後の就職にも活かされるようなスキル19項目から構成されているため「キャリア・企画」とした。第3領域は多様性を理解すること、マナーを守ることなど社会生活での規範や柔軟性を示す10項目から構成されているため「社会的規範と多様性理解」とした。第4領域は人と分業をする、人と人との交流を促す、課題を発見するなどの20項目から構成されていることから「チームの目標達成スキル」とした。第5領域は物怖じせずに発言、折り合いをつけるなどの自分の意見の主張にかかわる10項目から構成されていることから「自己主張方略」とした。第6領域は情報の共有、困っている人を助ける、支援を求めるなど対人関係に関する30項目から構成されていることから「対人スキル」とした。また、6つの領域は、それぞれ活動の内容や場面で大きく変化することが想定されると考えられることから、チームAとチームBとの合議で1つの尺度にすることが困難であると判断した。その結果、困難な出来事と学生の成長実感に関する6領域の計7つの尺度群にすることとした。また、6つの領域の測定方法については、成長実感という概念が曖昧なため、活動を通して各項目を遂行できる自信の程度である自己効力感（Bandura, 1977）を測定することで一致した。

3. 研究Ⅱ

3-1. 目的

研究Ⅱの目的は、研究Ⅰで作成した7つの尺度について、全国の大学生に調査をおこない、因子構造を確認し、尺度の信頼性と妥当性を検証することであった。

3-2. 方法

1) 対象者と調査日時・実施方法

調査はWeb調査会社であるクロス・マーケティング社に依頼した。2023年3月に全国の大学生を対象に実施し、2355名から回答が得られた。平均年齢と標準偏差は20.88±1.48歳であった。

2) 分析項目と教示文

調査項目は、研究Ⅰで作成した6領域と困難な出来事の項目以外に、健康や大学生活の満足度に関連する項目等を設問しているが、それらすべてを分析項目には含めず、本報告ではまず、6領域と1つの困難な出来事の項目を分析対象とした。教示文と回答件法はチームAとチー

ムBで検討会をおこない作成した。6領域の尺度の共通する教示文は、「以下は〇〇の行動について書かれています。あなたは課外活動を通して以下のことがらを、どの程度できる自信がありますか。あてはまるものにチェックを入れてください(なにも活動していない、これから活動する方は普段の学生生活を想像してお答えください).」とした。〇〇の部分に「レジリエンス」は【困難な出来事に遭遇した時】、「キャリア・企画」は【何かを企画や計画をする時】、「社会的規範と多様性理解」は【価値観やルールに遭遇した時】、「チームの目標達成スキル」は【何か責任のあることを任された時】、「自己主張方略」は【何か人から頼まれた時や計画する時】、「対人スキル」は【人と接する時】を当てはめた。回答件法は「(1)まったくできない」～「(6)よくできる」の6件法とした。困難な出来事の教示文は、「以下は課外活動をするときに遭遇する困難な出来事が書かれています。この半年でどれだけ困難な出来事に遭遇しましたか。あてはまるものにチェックを入れてください(なにも活動していない、これから活動する方は普段の学生生活を想像してお答えください).」とした。回答件法は「(1)まったくなかった」～「(6)多くあった」の6件法とした。

また、上記の質的内容分析で作成された尺度の妥当性の検証のために、立命館学園が2020年から2030年にかけて実現を目指す人間像にどの程度当てはまるかを測定する「R2030人間像尺度」(岸岡ら, 2022)と課外活動と正課を両立する学習方略を測定する「Student Successのための自己調整学習方略尺度(SS尺度)」(松本ら, 2022)、心的外傷後成長(Posttraumatic Growth: PTG)を測定するPTGI-J(Taku et al, 2007)、厚生労働省のストレスチェックの一部である簡易版のストレス反応尺度(厚生労働省, 2023)を分析項目として用いた。

3) 倫理的配慮

倫理的配慮として調査への参加、および同意に関しては、調査会社とモニタ間で契約されたプライバシー保護の規約に従った。また、回答の結果で生活上の不利益を被らないこと、研究目的で回答データを用いることをアンケートの冒頭で説明をおこなった。同意が得られた対象者のみ「次へ」を選択し、アンケートが開始されるようにした。回答に要する時間的拘束に対する謝礼は、調査会社とモニタ間で取り決められた現金等に変換できるポイントとして、調査会社を通じて支払った。

4) 分析方法

探索的因子分析は領域別に最尤法のプロマックス回転を用いて因子を抽出した。累積寄与率70%以上、因子負荷量.35を基準として、解釈可能になるまで項目の変更をおこない因子を確定させた。信頼性の検討にはクロンバックの α 係数を用いた。妥当性の検証には、基準関連妥当性を用いた。作成した6つの領域の尺度は、R2030人間像尺度、SS尺度、PTGI-Jと正の相関があると仮定した。また、「困難な出来事」はストレス反応と正の相関があると仮定した。なお、PTGI-Jの教示文の部分は「課外活動(または学生生活)で体験したもっとも困難な出来事」とした。

3-3. 結果と考察

7つの尺度の探索的因子分析の結果を表2から表8に示し、各尺度とR2030人間像尺度、SS尺度、PTGI-J、ストレス反応の結果を表9に示した。以下、各尺度と因子の命名と α 係数について記述した。

「レジリエンス」は3つの因子が抽出された。第1因子は「活動に対して夢中になって取り込めること」などの3項目から構成されることから【活動への価値を見出す力】と命名した。第2因子は「困難なことがあってもあきらめずに一つの活動を継続すること」などの3項目から構成されていることから【困難でも継続する力】と命名した。第3因子は「よく知っている人が思ってもいないことをしても冷静でいられること」などの3項目から構成されていることから【自身に一貫性を持たせる力】と命名した。クロンバックの α 係数は.850-.901であった。各下位尺度得点の平均値と標準偏差や因子間相関を表2に示した。

表2 成長実感（レジリエンス領域）尺度

	因子		
	1	2	3
活動への価値を見出す力($\alpha=.901, M=11.36, SD=3.48$)			
6.活動に対して夢中になって取り込めること	0.79	0.07	0.04
7.時間や労力がかかっても価値のあることだと思えること	0.71	0.08	0.14
5.今は意味のないことでも今後に役に立つと思えること	0.42	0.22	0.24
困難でも継続する力($\alpha=.869, M=10.87, SD=3.41$)			
1.困難なことがあってもあきらめずに一つの活動を継続すること	0.19	0.75	-0.02
4.課題の解決に向けて最後までやり抜く気持ちをもつこと	0.37	0.56	-0.01
2.新しいことを始める時、周りを巻き込んで力を借りること	-0.07	0.55	0.31
自身に一貫性を持たせる力($\alpha=.850, M=10.90, SD=3.32$)			
8.よく知っている人が思ってもいないことをしても冷静でいられること	0.08	-0.01	0.79
9.結果をイメージしながら対応すること	0.33	0.15	0.42
3.他人は他人であると割り切り行動すること	0.11	0.32	0.41
因子間相関	—		
	.847**	—	
	.833**	.811**	—
累積寄与率	70.99	76.37	81.55

**p<.01

注：回答件法1,まったくできない2,できない3,あまりできない4,すこしできる5,できる6,よくできる

「キャリア・企画」は4つの因子が抽出された。第1因子は「自分から会議や話し合いの場を設けること」などの4項目から構成されることから【運営・企画力】と命名した。第2因子は「作業スピードの見通しを持って時間を逆算すること」などの3項目から構成されていることから【計画力】と命名した。第3因子は「自身の役割について周りの声をきくこと」などの4項目から構成されていることから【役割調整力】と命名した。第4因子は「必要に応じて新しいPCのソフトや機材を使用すること」などの3項目から構成されていることから【ITスキル活用力】と命名した。クロンバックの α 係数は.848-.912であった。各下位尺度得点の平均値と標準偏差や因子間相関を表3に示した。

表3 成長実感(キャリア・企画領域)尺度

	因子			
	1	2	3	4
運営・企画力($\alpha=.878$, $M=10.24$, $SD=3.40$)				
5.自分から会議や話し合いの場を設けること	0.93	-0.01	-0.06	0.03
2.会議や話し合いで進行役として話を振ったり仕切ったりすること	0.68	0.04	0.14	0.01
4.こまめに会議や企画の連絡をすること	0.44	0.20	0.17	0.10
計画力($\alpha=.895$, $M=11.11$, $SD=3.40$)				
11.作業スピードの見通しを持って時間を逆算すること	0.07	0.85	-0.03	-0.01
10.ものごとの優先順位や効率を考慮して段取りを組むこと	0.04	0.70	0.11	0.07
12.手分けして課題に取り組めるよう、役割分担を決めること	0.19	0.40	0.39	-0.05
役割調整力($\alpha=.912$, $M=14.71$, $SD=4.48$)				
19.自身の役割について周りの声をきくこと	-0.05	0.05	0.81	0.08
17.周囲がコミュニケーションを取りやすいようサポートすること	0.24	-0.03	0.75	-0.07
13.他の人の意見を取り入れながら計画を立て、実行すること	0.02	0.34	0.54	0.01
15.自分にしかできないことをおこなうこと	0.08	0.16	0.47	0.19
ITスキル活用力($\alpha=.848$, $M=11.14$, $SD=3.31$)				
8.必要に応じて新しいPCのソフトや機材を使用すること	0.08	-0.03	-0.03	0.86
9.積極的にオンラインやビデオ会議システムを使って活動すること	0.28	0.07	0.06	0.50
6.インターネットを活用して適切な情報を検索すること	-0.19	0.37	0.21	0.43
因子間相関				
	—			
	.774**	—		
	.797**	.869**	—	
	.748**	.794**	.798**	—
累積寄与率				
	67.95	73.58	78.20	81.32

** $p<.01$

注: 回答件法 1,まったくできない 2,できない 3,あまりできない 4,すこしできる 5,できる 6,よくできる

「社会的規範と多様性理解」は2つの因子が抽出された。第1因子は「見知らぬ人や土地を避けないこと」などの4項目から構成されることから【国際・多様性の理解】と命名した。第2因子は「周りの人のお手本となるような行動を意識すること」などの4項目から構成されていることから【ルール・マナー】と命名した。クロンバックの α 係数は.904-.923であった。各下位尺度得点の平均値と標準偏差や因子間相関を表4に示した。

「チームの目標達成スキル」は4つの因子が抽出された。第1因子は「人と人が仲良くなれるよう繋ぐこと」などの4項目から構成されることから【チームをまとめる力】と命名した。第2因子は「課題を見つけたらそのままにしないようにすること」などの3項目から構成されていることから【課題を自分事にする力】と命名した。第3因子は「自分が支えられる側でもあり支える側でもあることを意識すること」などの4項目から構成されていることから【周囲を観察する力】と命名した。第4因子は「1人でやろうとせず周りに任せながら巻き込んで取り組むこと」などの4項目から構成されていることから【役割を分担する力】と命名した。クロンバックの α 係数は.900-.919であった。各下位尺度得点の平均値と標準偏差や因子間相関を表5に示した。

「自己主張方略」は2つの因子が抽出された。第1因子は「感情的にならずに相手に伝わるように発言すること」などの3項目から構成されることから【折り合い方略】と命名した。第

表4 成長実感（社会的規範と多様性理解領域）尺度

	因子	
	1	2
国際・多様性の理解($\alpha=.923, M=15.27, SD=4.47$)		
4.見知らぬ人や土地を避けないこと	0.88	-0.01
5.新しい文化に触れることで新しい価値観を見出すこと	0.77	0.12
3.自分と立場や考えが違う人を避けないこと	0.75	0.15
2.国内・国外の様々な人に対して、分け隔たりなく接すること	0.70	0.18
ルール・マナー($\alpha=.904, M=15.63, SD=4.43$)		
7.周りの人のお手本となるような行動を意識すること	0.04	0.85
8.必要に応じてルールやマニュアルを作成すること	0.07	0.79
6.決められた時間や期限を守ること	0.12	0.70
9.言葉遣いや態度などのマナーを身に付けること	0.28	0.61
因子間相関		
	—	—
	.818**	—
累積寄与率		
	72.28	79.68

**p<.01

注：回答件法 1,まったくできない 2,できない 3,あまりできない 4,すこしできる 5,できる 6,よくできる

表5 成長実感（チームの目標達成スキル領域）尺度

	因子			
	1	2	3	4
チームをまとめる力($\alpha=.907, M=14.70, SD=4.61$)				
13.人と人が仲良くなれるよう繋ぐこと	0.82	0.05	-0.04	0.08
14.いつでも相談してもらえるように普段から人と交流すること	0.70	0.10	0.07	0.06
11.親近感を持ってもらうために、少し冗談を言ったりふざけたりすること	0.48	0.05	0.25	0.05
15.常に明るい気持ちや表情で居ることを心掛けること	0.44	0.17	0.40	-0.10
課題を自分事にする力($\alpha=.900, M=11.11, SD=3.32$)				
20.課題を見つけたらそのままにしないようにすること	0.08	0.70	0.14	-0.01
19.自分の身近ではない課題についても自分事にする	0.18	0.69	-0.09	0.13
18.課題を発見し情報を整理すること	-0.02	0.57	0.28	0.08
周囲を観察する力($\alpha=.919, M=15.21, SD=4.43$)				
6.自分が支えられる側でもあり支える側でもあることを意識すること	0.13	0.04	0.62	0.12
7.自分が目標とする人を観察して特徴を取り入れること	-0.01	0.21	0.60	0.11
5.仲間と励まし合い周囲のモチベーションを維持すること	0.26	-0.03	0.49	0.22
10.周りの状況を観察してやるべきことを判断すること	0.01	0.36	0.49	0.06
役割を分担する力($\alpha=.912, M=14.42, SD=4.40$)				
3.1人でやろうとせず周りに任せながら巻き込んで取り組むこと	0.26	0.01	0.10	0.53
4.自分が学んだことを次の世代に伝えること	0.09	0.24	0.08	0.52
2.みんなの意見を聞き出してまとめること	0.03	0.13	0.25	0.49
9.それぞれの得意なことを活かして活躍できるような割り振りができること	0.18	0.18	0.21	0.37
因子間相関				
	—	—	—	—
	.791**	—	—	—
	.832**	.858**	—	—
	.822**	.849**	.884**	—
累積寄与率				
	71.54	75.35	78.25	81.08

**p<.01

注：回答件法 1,まったくできない 2,できない 3,あまりできない 4,すこしできる 5,できる 6,よくできる

2 因子は「立場が上の相手でも間違っている場合は指摘すること」などの 4 項目から構成され

ていることから【積極的方略】と命名した。クロンバックの α 係数は.861-.877であった。各下位尺度得点の平均値と標準偏差や因子間相関を表6に示した。

表6 成長実感(自己主張方略領域)尺度

	因子	
	1	2
折り合い方略($\alpha=.887$, $M=11.21$, $SD=3.21$)		
5.感情的にならずに相手に伝わるように発言すること	0.84	-0.02
7.自分の意見と周囲の意見を比較しながらより良いゴールを目指すこと	0.83	0.05
4.人ができそうな仕事と自分ができそうな仕事を分担すること	0.70	0.20
積極的方略($\alpha=.861$, $M=10.59$, $SD=3.21$)		
2.立場が上の相手でも間違っている場合は指摘すること	-0.02	0.92
3.どんな状況でも物怖じせずに発言すること	0.08	0.75
1.全て受け入れるのではなく自らの判断で断ること	0.33	0.49
因子間相関	—	—
	.762**	—
累積寄与率	70.46	80.41

** $p<.01$

注: 回答件法 1,まったくできない 2,できない 3,あまりできない 4,すこしできる 5,できる 6,よくできる

「対人スキル」は6つの因子が抽出された。第1因子は「他学年の人からアドバイスをもらうこと」などの3項目から構成されることから【他者から援助を得る力】と命名した。第2因子は「小さなしぐさや態度からその人の感情を読み取ること」などの3項目から構成されていることから【相手の気持ちを理解する力】と命名した。第3因子は「誤解をうまないようにこまめに情報共有をすること」などの3項目から構成されていることから【情報を共有する力】と命名した。第4因子は「感情的になりそうな場面では深呼吸をして落ち着かせること」などの3項目から構成されていることから【自己の感情を管理する力】と命名した。第5因子は「オンラインでも見られていることを意識して表情に気をつけること」などの3項目から構成されていることから【オンラインで交流する力】と命名した。第6因子は「困っている人が居たら自分にできることを考えて手助けすること」などの3項目から構成されていることから【人を想いやる力】と命名した。クロンバックの α 係数は.863-.919であった。各下位尺度得点の平均値と標準偏差や因子間相関を表7に示した。

「困難な出来事」は5つの因子が抽出された。第1因子は「オンラインだと発言しづらい場面に遭遇したこと」などの3項目から構成されることから【オンライン活動の難しさ】と命名した。第2因子は「アルバイトや家事との両立をする時間がないこと」などの3項目から構成されていることから【正課・生活との両立の難しさ】と命名した。第3因子は「周りの人のフォローをしなければならなかったこと」などの3項目から構成されていることから【裁量のない出来事】と命名した。第4因子は「求められている技術に届いていなかったこと」などの3項目から構成されていることから【求められる要求の高さ】と命名した。第5因子は「グループでの雰囲気が悪くなり気まづくなったこと」などの3項目から構成されていることから【予期

表7 成長実感（対人スキル領域）尺度

	因子					
	1	2	3	4	5	6
他者から援助を得る力($\alpha=.895, M=10.93, SD=3.48$)						
13.他学年の人からアドバイスをもらうこと	0.85	-0.04	0.05	0.03	0.00	0.01
15.先輩からアドバイスを受けること	0.74	0.03	0.00	0.03	-0.03	0.15
20.学年を越えて交友関係を広げること	0.69	0.07	0.00	-0.01	0.07	0.05
相手の気持ちを理解する力($\alpha=.919, M=11.67, SD=3.45$)						
16.小さなしぐさや態度からその人の感情を読み取ること	0.07	0.88	0.04	0.01	0.08	-0.13
17.コミュニケーションから感情を読み取ること	-0.02	0.56	0.05	0.02	0.00	0.35
18.相手の気持ちや感情を考へること	-0.05	0.47	0.09	0.10	-0.03	0.38
情報を共有する力($\alpha=.913, M=11.58, SD=3.31$)						
1.誤解をうまないようにこまめに情報共有をすること	0.10	0.09	0.82	0.02	0.07	-0.19
3.こまめに情報を共有しながら取り組むこと	0.03	0.01	0.72	0.07	0.04	0.07
2.相手と意見をすり合わせるこゝ	-0.04	0.05	0.71	-0.02	-0.04	0.28
自己の感情を管理する力($\alpha=.913, M=11.42, SD=3.24$)						
28.感情的になりそうな場面では深呼吸をして落ち着かせること	0.04	0.01	-0.01	1.00	-0.01	-0.11
27.感情的になってしまいそうな場合はその場を離れること	0.00	0.06	0.13	0.47	0.01	0.23
29.自分の気持ちに気づくこと	0.04	0.10	0.10	0.36	0.11	0.20
オンラインで交流する力($\alpha=.863, M=11.05, SD=3.24$)						
6.オンラインでも見られていることを意識して表情に気をつけること	-0.04	0.16	0.01	0.04	0.70	0.02
4.オンラインでは、いつもより大きくリアクションをとること	0.16	0.05	0.03	-0.02	0.63	-0.02
7.不測の事態にもオンラインを活用するなどの工夫をおこなうこと	0.06	-0.12	0.15	0.04	0.57	0.21
人を想いやる力($\alpha=.913, M=11.52, SD=3.40$)						
22.困っている人が居たら自分にできることを考へて手助けすること	0.14	0.16	0.05	0.01	0.05	0.55
25.周囲の人と喜んだり、周りを励ましたりすること	0.17	0.17	0.11	0.03	0.02	0.46
24.相手の強みやできていることに目を向けること	0.10	0.16	0.03	0.14	0.10	0.45
因子間相関						
	-					
	.719**	-				
	.719**	.804**	-			
	.714**	.803**	.789**	-		
	.744**	.776**	.782**	.762**	-	
	.782**	.858**	.825**	.837**	.801**	-
累積寄与率						
	68.01	72.63	75.93	78.86	81.70	83.76

**p<.01

注：回答件法 1,まったくできない 2,できない 3,あまりできない 4,すこしできる 5,できる 6,よくできる

していない出来事】と命名した。クロンバックの α 係数は .758-.893であった。各下位尺度得点の平均値と標準偏差や因子間相関を表 8 に示した。

本報告で作成した尺度の信頼性に関して、 α 係数は「困難な出来事」の【予期していない出来事】のみ .800を下回ったが .750以上であるため許容の範囲内と考えられる。主に項目19の「けがや病気で思い通りの活動ができなかったこと」を経験した学生が少ないことが α 係数を低下させる原因となっていた。しかし、例えばスポーツをおこなっている学生にとっては、けがや病気で試合等に参加できないことは大きなストレスとなると想定されるため、今回の尺度では項目の除外をおこなわなかった。それ以外のすべての因子において α 係数は .800以上と高く、学生の成長実感尺度群は高い信頼性を有していることが明らかとなった。

次に尺度および各下位尺度得点と関連性について、成長実感尺度群の「困難な出来事」以外はいずれも R2030人間像尺度、SS 尺度、PTGI-J と中程度以上の正の相関が認められた。また、「困難な出来事」はストレス反応と正の相関関係が認められた。本報告において PTGI-J は、課外活動や学生生活で経験した困難な出来事を通して獲得した成長を測定した。6 領域は PTGI-J と、「困難な出来事」はストレス反応と正の相関が認められたことから、本報告の尺度群は妥当性を有していることが明らかとなった。

表8 成長実感(困難な出来事)尺度

	因子				
	1	2	3	4	5
オンライン活動の難しさ($\alpha=.844$, $M=7.87$, $SD=4.00$)					
8.オンラインだと発言しづらい場面に遭遇したこと	0.93	-0.02	-0.07	0.01	0.03
7.オンラインで対応する必要があること	0.87	0.05	0.02	0.05	-0.16
6.オンラインのミーティングでうまく意思疎通ができないこと	0.74	-0.05	-0.03	-0.10	0.33
正課・生活との両立の難しさ($\alpha=.879$, $M=8.44$, $SD=3.93$)					
17.アルバイトや家事との両立をする時間がないこと	0.01	0.90	0.03	-0.14	0.04
16.授業や課題との両立が難しいこと	-0.04	0.81	0.02	0.09	0.00
18.課題の準備の仕方や計画の立て方が分からなかったこと	0.06	0.57	-0.06	0.21	0.13
裁量の少ない出来事($\alpha=.864$, $M=7.87$, $SD=3.70$)					
3.周りの人のフォローをしなければならなかったこと	0.00	-0.01	0.90	0.02	-0.03
2.周りの人の機嫌を取らなければならなかったこと	-0.11	0.02	0.81	-0.03	0.17
9.自分の思い通りに相手が行動してくれなかったこと	0.30	0.06	0.41	0.11	0.05
求められる要求の高さ($\alpha=.893$, $M=8.82$, $SD=4.16$)					
15.求められている技術に届いていなかったこと	-0.03	-0.03	-0.08	0.95	0.13
14.他者との実力差を感じてしまったこと	0.01	0.06	0.07	0.79	-0.01
10.今までやったことがないような事をしてはいけないこと	0.21	0.06	0.31	0.44	-0.14
予期していない出来事($\alpha=.758$, $M=6.89$, $SD=3.17$)					
5.グループでの雰囲気が悪くなり気まずくなったこと	0.05	-0.02	0.33	-0.10	0.59
12.やるべきことができずに怒られたこと	-0.06	0.02	0.04	0.30	0.56
19.けがや病気で思い通りの活動ができなかったこと	0.03	0.21	-0.08	0.04	0.48
因子間相関					
	—				
	.575**	—			
	.653**	.643**	—		
	.650**	.737**	.751**	—	
	.576**	.659**	.692**	.653**	—
累積寄与率					
	57.05	64.68	70.79	76.34	80.29

**p<.01

注：回答件法1,まったくなかった2,なかった3,ほとんどなかった4,少しあった5,あった6,多くあった

4. 総合考察

まず、本報告の特徴は、8051記述という膨大な質的データを専門家と職員とで分析をおこなったことである。そのため、本尺度群の項目には学生や職員の表現が反映されており、全項目ともに具体的な行動レベルを示したものになった。実際に回答する学生やそれを見る教職員にとっても、どのような行動を意味するのか想像しやすい尺度群が完成したと考えられる。また、作成した7つの尺度は項目数が最大で18項目で、因子はすべて3～4項目で構成されているため、実施者・回答する側の双方にとって負担の少ない簡便な構成になっている。この特徴は、様々な学生の質的データを専門職と職員が協同で質的な分析をおこなったことにくわえて、実際の使用場面を想定して量的分析をおこなう混合研究法の探索的順次デザインを用いたため実現できたと考えられる。さらに本報告では、課外活動の種類によって、評価をしたい視点は異なることに注意をしながら尺度の開発をおこなった。課外活動の定義の多様さや研究者の目的から課外活動を通じた成長を測定する尺度は一側面だけの評価になるか、多面的にするために項目数が多くなりやすい。本報告では、6領域と困難な出来事の尺度群にすることで、より網羅的に成長実感を測定するアセスメントの開発ができたと考える。さらに尺度群とした

表9 各領域尺度とR2030人間像尺度, SS尺度, PTGI-J, ストレス反応との相関

	R2030人間像	SS (学習方略)	PTGI-J	ストレス反応
レジリエンス合計点	.623**	.553**	.456**	-.114**
活動への価値を見出す力	.593**	.522**	.433**	-.093**
困難でも継続する力	.606**	.537**	.453**	-.114**
自身に一貫性を持たせる力	.561**	.502**	.402**	-.116**
キャリア・企画合計点	.651**	.619**	.497**	-.111**
運営・企画力	.581**	.568**	.458**	-.109**
計画力	.613**	.597**	.462**	-.116**
役割調整力	.648**	.589**	.495**	-.117**
ITスキル活用能力	.544**	.522**	.406**	-.062**
社会的規範と多様性理解合計点	.625**	.582**	.456**	-.091**
国際・多様性の理解	.587**	.533**	.427**	-.080**
ルール・マナー	.604**	.576**	.443**	-.094**
チームの目標達成スキル合計点	.682**	.641**	.554**	-.112**
チームをまとめる力	.603**	.566**	.522**	-.096**
課題を自分事にする力	.647**	.627**	.508**	-.099**
周囲を観察する力	.663**	.608**	.516**	-.107**
役割を分担する力	.650**	.612**	.531**	-.118**
自己主張方略合計点	.635**	.609**	.494**	-.103**
折り合い方略	.634**	.609**	.487**	-.116**
積極的方略	.557**	.535**	.441**	-.078**
対人スキル合計点	.676**	.645**	.541**	-.097**
他者から援助を得る力	.602**	.579**	.518**	-.123**
相手の気持ちを理解する力	.595**	.567**	.470**	-.049*
情報を共有する力	.610**	.587**	.462**	-.085**
自己の感情を管理する力	.606**	.584**	.469**	-.110**
オンラインで交流する力	.624**	.593**	.514**	-.071**
人を想いやる力	.631**	.591**	.501**	-.090**
困難な出来事合計点	.133**	.081**	.146**	.330**
オンライン活動の難しさ	.132**	.093**	.137**	.208**
正課・生活との両立の難しさ	.107**	.049*	.115**	.322**
裁量のない出来事	.148**	.103**	.163**	.269**
求められる要求の高さ	.119**	.078**	.116**	.272**
予期していない出来事	.052*	.013	.089**	.350**

**p<.01, *p<.05

ことで、例えばイベントや交流系のプログラムであれば「キャリア・企画」を使用する、ピア・サポート活動など学生を支援する活動の場合は「対人スキル」を使用するなどの目的に合わせて選択型のアセスメントを可能にしたと考えられる。くわえて、成長実感を測定する際に比較となる全国の大学生の平均値が得られたことも本報告の特徴と考えられる。

正課と課外活動は切り離されて考えられがちであるが、本報告では課外活動を通した成長実感は学習方略とも相関することが明らかとなった。学生の多くは、クラブ・サークルや留学、インターン、ピア・サポート活動など課外活動をおこなっている。その中で、学業と課外活動を両立するためには、自己調整学習方略 (Zimmerman et al., 1996) を身につける必要がある。SS尺度は課外活動を含んだ学習方略 (松本ら, 2020) であるため、本尺度と相関が示された

と考えられる。課外活動を通じた成長実感の高い学生は、学生生活を成功させるための学習方略も持ち合わせていることが本報告より明らかとなった。「困難な出来事」に関して、Karasek (1979) の職業性ストレスでは仕事の裁量権のなさや要求度の高さがストレッサーになるとされている。学生の課外活動においても、裁量のない出来事や要求度の高い出来事に多く暴露された学生のストレス反応が、高く表出されることは新たな知見であると考えられる。その他に研究Ⅱでは、立命館大学以外の全国の学生に調査をおこなったにも拘らず、課外活動の成長実感が高い学生ほど本学園が目指す学生像 (R2030人間像) の得点が高かった。R2030人間像はチャレンジ精神、社会課題の発見・解決、グローバル・シチズンシップから構成されているが、これは2040年に向けた高等教育のグランドデザインの答申 (文部科学省, 2018) であらためて資質・能力が強調された学士力 (文部科学省, 2008) や社会人基礎力 (経済産業省, 2010) と類似する部分もあり、全国の大学でも少なからず学生の育成目標と組み込まれていることから、相関が示されたのではないかと考えられる。

一方で、本報告では、各尺度や各下位尺度得点がR2030人間像やPTGI-J、学習方略との相関関係は認められたものの、各尺度との因果関係の特定には至っていない。例えばレジリエンスを例にとると、困難な出来事からの立ち直りのプロセス全体をレジリエンスとする場合と、回復に影響する個人の要因をレジリエンスとする場合がある (小塩, 2012)。課外活動での困難な出来事がどのような過程で課外活動を通じた成長実感につながるのか、その成長実感と学園の目指す人間像や学習方略にどのような影響があるのかなど、プロセスの解明と成長実感を促進する関与について、検討をしていく必要がある。

謝辞

本報告は「立命館大学 Grassroots Practice Support Program to Promote R2030: GPSP (22G051)」の助成によっておこなわれた取り組みである。

本取り組みにご支援をいただきました学生部の専門職・職員の皆様、GPSP事務局の皆様にご心よりお礼申し上げます。質的分析にご協力いただきました心理専門家の皆様にご心よりお礼申し上げます。

引用文献

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84 (2), 191-215.

橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年 (2010) 「大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討」『実験社会心理学研究, 50 (1), 76-81.

樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して：KH Coder official book 第2版』, ナカニシヤ出版.

広田君美（1963）『集団の心理学』誠信書房。

Karasek Jr, R. A. (1979). Job demands, job decision latitude, and mental strain: Implications for job redesign. *Administrative science quarterly*, 24, 285-308.

池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平（2018）「大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響」『日本教育工学会論文誌』, 42（1）, 1-14.

池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平（2019）「大学生の準正課活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響－他者からの支援や学生の関与を手掛かりに－」『日本教育工学会論文誌』, 43（1）, 1-11.

泉谷道子・山田剛史（2013）「体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長」『大学教育実践ジャーナル』 11, 61-67.

抱井尚子（2015）『混合研究法入門—質と量による統合のアーサー—』医学書院。

川喜田二郎（1970）『続・発想法－KJ法の展開と応用』中央公論社。

川本哲也・榊原良太・村木良孝・小島淳広・石井悠・遠藤利彦（2016）「体験活動を通じた大学生の社会情緒的発達：感情制御に着目して」『発達心理学研究』, 27（1）, 32-46.

経済産業省（2010）. 社会人基礎力『育成の手引き：日本の将来を託す若者を育てるために教育の実践現場から』経済産業省。

岸岡奈津子・山野洋一・松本清・茅根未央・木原宏子・渡邊あい子・石田明菜・西田祐太郎・五坪智彰（2022）「ピア・サポーター活動の成長プロセスとその要因における定量的評価—Student Success Program（SSP）ピア・サポーターの事例から—」『大学教育学会第44回大会発表要旨集録』, 166-167.

岸岡洋介・清水栄子・岸岡奈津子（2023）「成長支援プログラムの実践における学生アドバイザーのコンピテンシーに関する一考察」『アカデミック・アドバイジング研究』, 1, 9-16.

厚生労働省（2023）「職業性ストレス簡易調査票」.

(<https://stresscheck.mhlw.go.jp/download/material/sc23.pdf>) 参照日：2023年4月18日。

Kuh, G. D., Kinzie, J. L., Buckley, J. A., Bridges, B. K., & Hayek, J. C. (2006), What matters to student success: A review of the literature (Vol.8). Washington, DC: National Postsecondary Education Cooperative.

松本清・岸岡奈津子・山野洋一・石田明菜・渡邊あい子・木原宏子・茅根未央・西田祐太郎・五坪智彰（2022）「学生生活のセルフマネジメントスキルの評価ツール「Student Success 尺度」の開発」『大学教育学会第44回大会発表要旨集録』, 168-169.

溝上慎一（2007）「大学生が大学教育で身につける汎用的能力（Generic Skills）の実証的検討。大学における学生の質に関する国際比較研究—教育の質保証・向上の観点から—」『（秦由美子代表科研）中間報告書』, 14-26.

文部科学省（2000）「大学生における大学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った

大学作りを目指してー」.

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm), 参照日2023年4月22日

文部科学省 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」.

(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf), 参照日2023年4月23日

文部科学省 (2020) 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm) 参照日2023年4月25日

村木良孝 (2016) 「レジリエンスの統合的理解に向けて: 概念的定義と保護因子に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 55, 281-290.

Newcomb, T. M. (1950), *social psychology*. NY: Dryden.

小塩真司 (2012) 『3章2節レジリエンスの理論と測定. 近藤卓 (編) PTG 心的外傷後成長: トラウマを超えて』. 金子書房, pp.183-191.

迫俊道, 荒井貞光 (2002) 「大学生のクラブ・サークル活動に関する研究」『広島体育学研究』28, 11-20.

茂里一紘 (2000) 「「人間基礎力」と課外活動の充実」『大学と学生』, 427, 11-14.

Taku K, Calhoun LG, Tedeschi RG, Gil - Rivas V, Kilmer RP, Cann A, (2007) Examining posttraumatic growth among Japanese university students, *Anxiety Stress & Coping*, 20, 353-367.

Terenzini, P. Springer, L. Pascarella, E. & Nora, A. (1995), Influences Affecting the Development of Students' Critical Thinking Skills, *Research in Higher Education*, 36 (1), 23-39.

山田剛史・森朋子 (2010) 「学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割」『日本教育工学会論文誌』, 34 (1), 13-21.

Zimmerman, B. J., Bonner, S., & Kovach, R. (1996). Developing self-regulated learners: Beyond achievement to self-efficacy. American Psychological Association.

Development of a Sense of Growth Scale for University Students through Extracurricular Activities: Exploring Sense of Growth through Qualitative Content Analysis and Reviewing the Factor Structure of the Sense of Growth Scale

FUKAYA Mami*, KIHARA Hiroko**, KISHIOKA Natsuko**, KAYANE Mio***,
WATANABE Aiko****, ISHIDA Akina***, MATSUURA Yuko****,
NISHIDA Yutaro****, OMOTO Marie****, NAKAYAMA Hirofumi****,
HONDA Yoko***, HOSOKAWA Chie**, HORIBE Tatsuya*****,
MATSUMOTO Sayaka*****, YAMANO Yoichi*

Abstract

This paper reports on the activities in the fiscal year of 2022 from the Visualization of Student Growth in Extracurricular Activities: Creation and Standardization of Evaluation Indicators, Application to Students in Various Activities, and Exploration of the Growth Process in the Ritsumeikan University Grassroots Practice Support Program to Promote R2030: GPSP.

This report is based on mixed methods research. Using qualitative data from 3155 students and quantitative data from 2355 students, the objective was to develop a multidimensional scale to measure student growth. Study I, 140 difficult events and growth factors were extracted from the free descriptions of what 3155 university students who had engaged in extracurricular activities from all over Japan had learned through these extracurriculars. From these factors, 109 items were extracted and seven scales were developed, the latter of which were used in this survey. Study II was conducted on 2,355 university students nationwide in March 2023. As a result of the factor analysis, a total of 26 factors were extracted from the seven scales.

Cronbach's alpha coefficients of the scales were high, ranging from .758 to .923, and they were positively correlated with the scale to measure ideal qualities that Ritsumeikan University expects students to develop between 2020 to 2030. In addition, a correlation was found between the learning strategies scale for student success, PTGI-J (Posttraumatic Growth Inventory), and the stress reaction scale. The above has enabled us to develop an assessment with a certain degree of reliability and validity.

Keywords:

extracurricular activities, sense of growth, self-efficacy, student success, mixed methods research

-
- * Correspondence to: FUKAYA Mami^①, YAMANO Yoichi^{②③}
Contract staff (professional staff), Office of student Affairs at Kinugasa Campus, Ritsumeikan University
56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto 603-8577 Japan
E-mail ① :fukay-a@st.ritsumeai.ac.jp
E-mail ② :yamano-a@st.ritsumeai.ac.jp
E-mail ③ :y-yamano@hotmail.co.jp
- ** Correspondence to: KIHARA Hiroko, KISHIOKA Natsuko, HOSOKAWA Chie
Office of student Affairs at Osaka Ibaraki Campus, Ritsumeikan University
2-150 Iwakura-cho, Ibaraki, Osaka 567-8570 Japan
- *** Correspondence to: KAYANE Mio, ISHIDA Akina, HONDA Yoko
Office of student Affairs at Biwako-Kusatsu Campus, Ritsumeikan University
1-1-1 Noji-higashi, Kusatsu Shiga 525-8577 Japan
- **** Correspondence to: WATANABE Aiko, MATSUURA Yuko, NISHIDA Yutaro, OMOTO Marie,
NAKAYAMA Hirofumi
Office of student Affairs at Kinugasa Campus, Ritsumeikan University
56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto 603-8577 Japan
- ***** Correspondence to: HORIBE Tatsuya
Horibe Clinic
3-59 Oota yao, Osaka 581-0037 Japan
- ***** Correspondence to: MATSUMOTO Sayaka
Tokyo Institute of Technology
2-12-1 Ookayama, Meguro-ku, Tokyo 152-8550 Japan